325
409

修驗摘要記

8

始

修驗摘要記

325-409

宮内省印

自序

一、此小編はもと、版に刻して汎く識者の高覽に供する目的なれども、即ち本年四月一日より四七日間の日限を附して醍醐派總本山傳法院の開設せらるゝ事となり、余淺學菲才の身を以て專門大教の義の一班を講ずべき命を拜したれば、講義用の草稿として修驗書鈔を繙讀する儘に摘記したるものにして、而かも僅かに十四五日を以て用意不周到の裡にものせしが故に杜撰また免れざる處なり、然るを今これを版に附して世に頒たんとす、人或は其大膽に驚かむ、然れども里諺に『牛に率かれて善光寺詣り』て

内交

ふ事もあれば、今此拙なき小編に依つて、將に頽れむとする修驗道考究者の增加を煽る因緣ともなり得ば余の本望とする所なり。

一、本稿の成るや、余が常に其學德共に高きを慕ひつゝある現代の學匠海浦義觀僧正に本稿を提して檢閲を請ひしに僧正は大曼荼羅淨寫に寸暇の餘裕もなき時間を强ひて割き、言々句々評檢し誤謬の點を訂正されし師恩は永く胸憶に記して忘れざる處なり。

大正五年四月中旬

細川孝源誌す

蓋聞八繕深海。非ニ修足一不レ能レ極ニ其底一。九萬高風。非ニ鵬翼一不レ得レ見ニ其頂一。盤薄厚地。劫火之所ニ灰滅一。鬱嵂濃雲。猛風之所ニ搴卷一。摩尼奇珠。待ニ大龍一而雨レ寶。輪王妙藥。對ニ鄙人一以爲レ毒。何況眞言秘藏。超ニ三自一以難レ聞。金剛佛戒。過ニ十地一而難レ得。自レ非ニ輪王種姓大機菩薩一。誰能開ニ五智於一心一。得ニ三密乎凡身一。雖レ然醫眼所レ視。百毒變レ藥。佛慧所レ照。衆生卽佛。衆生體性諸佛法界。本來一味都無ニ差別一。衆生不レ悟長夜受レ苦。諸佛能覺常恒安樂。是故爲レ令下衆生頓覺ニ心佛一。速歸中本源上。說ニ眞言法門一。爲ニ迷方之指南一矣。我驗乘曩祖神變大士。感ニ見箕面瀧口一。稟ニ授龍樹正印一。一切如來祕奧之敎。自覺聖智修證法門。以レ心傳レ心多不レ載ニ於筆端一。以付ニ法于末資一也久矣。明治維新以來。世崇レ新而輕レ舊是故我修驗之徒。多忘ニ相承正法一。將レ近ニ于淪滅一。嗚呼是天之禍ニ驗乘一耶。抑我宗徒之不ニ盡力一豈得レ不ニ浩嘆一哉。頃我神變主筆細川孝源師。研ニ究驗乘一。搜ニ集祕決一。著ニ一書一

名曰修驗摘要記非敢欲公諸世唯示門下而已。然如校正及序言唯師爲賴。敢請勿辭。遠寄示之屬余。々受而讀之則。博覽搜素。驗乘法門無遺漏。我宗之明月夜光而爲迷方之指南。其功可謂偉矣。隨喜之餘。乃忘固陋聊演緣由以爲之叙云。

大正五年四月

驗乘末資海浦義觀識

目次

序說第壹　佛教研究者の態度……一頁
序說第貳　密教學者の態度……四頁
序說第參　驗乘行者の態度……六頁
第壹章　修驗道の名義釋……
第壹項　山伏……九頁
第貳項　山臥……一三頁
第參項　修驗……一五頁
第四項　客僧……一七頁
第貳章　二種分別……
第壹項　覺道分別……一九頁
第貳項　三身分別……二三頁
第參章　修驗道の法系……

第壹項　峰中法流と惠印法流……二七頁
第貳項　法系血脈……二八頁
第四章　法義の要領……
第壹項　入峰修行の意趣……三四頁
第貳項　十界一如の行……三七頁
第參項　花供入峰……五〇頁
第四項　成佛論……五四頁
第五項　色心論と生死觀……五七頁
第六項　三有六大……六一頁
第五章　小問答……

目次終

修驗摘要記

海浦義觀閲
細川孝源著

序說　第壹

佛教研究者の態度

一度び東京帝國大學に印度哲學の講座を設けられしより以來世人の佛典研究に意を注ぐ者漸く其多きを加ゆ就中密教研究者の日に倍々多きを致さんとする傾向を示せるは吾人の最も注目すべき現象といふべし。

今更ら喋々する迄もなく、宗教の眞價は理論の研究に非ずして

實修實證にあり、實證に意志なくして徒らに教理の研究に沒頭せんとするもそは全く無意義の努力にして徒勞に屬せんのみ、故に佛教研究に志す者は常に左の二種の方法に於て區別あるを明かに認識せざるべからず。

佛教研究 ｛教理的研究——傳習的研究　實證的
　　事實的研究——批判的研究——究理的｝

卽ち教理的研究とは傳習的研鑽法にして師資傳受的に修學し先德の見解を第一に尊重し專ら信仰的精神を以て修習するをいひ、事實的研究とは批判的精神を以て教理を研究し不合理の點あるを發見する時は古師先德の口說と雖も容赦なく反駁討究するをいふ、

例へば宗教科學者が東西古今の宗教の事實を解剖批判し、或は輓近行はれつゝある世人學者の佛典研究に對する態度、若くは各宗祖師が一宗を建設するに當り諸經論の高下淺深優劣を自己獨特の見解に依り判定したるが如きはこれ批判的研究に屬すべき者なり。

斯くの如く二種の樣式を渾然紛入し或は事實的研究にのみ沒頭し教理的研究の存するを忘るゝが如き事あらんか、宗教の眞價は得て窺ふに至らずして止まむのみ。而も方今多く行はれつゝある佛教研究者、專ら事實的批判的研究のみあるを知りて教理的研究の存するを忘れ若くはこれを無視し、教理に存する口說等を知らず淺薄なる獨斷的批判を下して得々たるは貶すべき事といふべし

吾人は事實的研究の必要なるを認むると共に教理的研鑽に依つて宗教の眞價を躰得するに努めざるべからず。

序說　第貳　密教學者の態度

密教は研究すべきものに非ずして學ぶべきものなり、蓋し密教の淵原を尋ぬれば、事實的研究者は常にいふ、印度古代思想卽ち吠陀經典中に萠芽を發生したるなりと、然れ共佛祖口授の密法はかくの如きに非ず、卽身頓證の密傳、大日覺王如來の心肝は十界色心依正皆是れ法界にして說者を俟たざる法然法爾として恒存す、故に大日經の疏には「緣謝緣滅」とて機興ずれば炳現し、機謝すれば隱滅すと說かれたり。曩祖神變大士邦土に在つて而も親

しく龍樹大士より密法の口授を受けたるが如き明かに之れを證するものといふべし。專ら事實的研究に據る者は之を以て荒唐無稽の虛說として言下に排斥し去るべしと雖も之を認容せざれば密法相承の義更に成立し得ざるを奈何せん、善無畏金剛智等未だ密法を修得せざるに先ち遠く山海を隔つる邦土に在つて曩祖神變大菩薩の熾んに密法を誦せしが如き抑も解了し得ざるに非ずや。

斯くの如く密教甚深の秘說は一に師資面授に依り口說を受くるに非ざれば得て領解すべからず、加之らず大日覺王如來の心肝は顯乘依用の諸經論と意を異にし、紙筆に載するを誡むる所なり、之れ「密教は研究すべきものに非ずして學ぶべきものなり」とい

ひし所以なり。大日經の疏に云く

若し眞明の行を久習して傳授に堪ゆん者に非ざらんよりは正に心を以て相傳するに文を以て載すべからず、故に師口を以て相授く、經には說かざる所なりと、吾人密學の徒更に又何をか贅せん。

序說　第三　驗乘行者の態度

弘法大師佛敎を判釋して顯密二敎の二種に分類し給へり、顯敎とは倶舍、成實、法相、三論、天台、華嚴等凡て淺權の經論を依用する宗旨をいひ、密敎とは法身大日如來直說の諸經を依據とする最極甚深の宗旨に名けしなり。此二種の中に於て修驗道は果して何れに屬すべきか、蓋し修驗道は修驗道として特殊の職能を藏し、顯敎にも非ず密敎にも屬せず、換言すれば顯密二敎を通含せるものなりと雖も、而かも其眞言を呪誦する等より觀れば之れ密敎に屬すべきなり。然り驗乘は之れ密敎にして本有法爾六大の深義を實修實行し實證を主旨とする密敎なり。

吾人は上に於て宗敎の眞價は實證にあり、更に密法は師資面授にありといへり、驗道行者は此二個の意義を明かに確認したる上更に六大本有の實修實證を忘るべからず、學匠海浦義觀僧正の懸談は吾人の此言を證明す、卽ち云く

修驗秘訣集と題せる事は修驗道の切紙にて往古は入峰修行の

行者のみに一通二通づゝこれを許せし事なり、之れも中古の事にて上古のところは唯口授心傳にてありしよし云云と、此文意に於て吾人が所謂、唯授口傳の密法に依る驗道行者は實修實證すべき事を分明にせられたるものといふべし。

第壹章　修驗道の名義釋

序說に於て既でに言へりし如く、宗教の眞價は實修實證に依りて初めて發揮するものなり、佛陀一代の經說八萬四千の法門も要とする所は實修實證、轉迷開悟の一句に外ならず、こゝに意を致したる弘法大師は廣汎なる佛經中より髓を拔き骨を徹して當相卽道卽事而眞の一句を擇り以て眞言一家を建立し給へり、今驗道の

旨主とする所亦此卽事而眞の實修實證に外ならず、卽ち六大法界の道理を修行し六大本有法界の性位を驗證するを宗趣となすが故に名けて修驗道といふ、而かも澆末の徒甚深旨の存する所を辨へず此名義を厭ふ者あるは冥にこれ憫むべき事といふべし。

然り而して此六大法身本有本覺の道を修行する能修の行者に得名の四種分別を有す、卽ち山伏、山臥、修驗、客僧これなり、以下項を分ちて說明すべし。

第壹項　山伏

此山伏なる意義を釋するに當り先づ修驗法義建立の二旨主に就て一言するの要あり、卽ち其二旨主とは實事、表相之此二にして

凡身卽佛の實修實證は實にこれあるに依るなり、所謂其實事とは實際的意義を有し、表相とは深理の表明なり、例へば頭巾を釋するに當り、山氣を防がんが爲に頭巾を用ゆといへば實際的意義の說明にして實事上の釋なり、然るをそれに十二の黒色を用ゆるより說明して、これ無明十二因緣を表するなりと釋する時は卽ち深理を表明する表相釋なり。

今山伏の二字に於ても同ドく此二種の解釋法を有するなり、今說明の便宜上更に條を分ちて述ぶべし。

(1) 表相上の釋

表相上より山伏の二字を釋せば、山とは三身卽一の義にして、

伏とは無明法性不二の義なり、所謂其三身とは法身、報身、應身の三にして、法身とは宇宙法界と融通無礙せる心法なり、報身とは法界に周遍せる五大色法なり、應身とは萬事の用をなす色心不二の作用をいふ、此三身は卽ち一身に具すといふ深義を詮顯せんが爲に「山」と名けしなり。

(竪の三畫は三身、横の一畫は三身卽一の義)

尙此外更に山の字に就て三部合行、三諦一念、三因一性等の深義

あれ共今は説明の遑なければ知悉せんとする者乞ふ『山伏二字義』に就て觀よ。

次に伏を無明法性不二の義といへるは卽ち伏字を解剖すれば、「人」と「犬」の合成なり、人を以て法性とし、犬を以て無明とす、所謂其無明とは煩惱の異名にして法性とは本有六大河字不生の眞理なり、此二者二にして而かも不二なる深義を詮顯して伏と名けしなり。

伏……無明（煩惱）
……法性（法性六大）　二而不二

(2) 實事上の釋

實事上より山伏の二字を解釋せば山に伏して常に修行する輩らなるが故にかく名けしものなり、元來山に、フスといふ意義より山伏と名けたるものなれば山臥と書するを以て正訓とすべきが如し と雖も上述の如く無明法性不二の深義を表すると共に兼ては又伏臥に區別し以て本覺始覺の二種を區分せん意趣に依り山伏とせしものなり。

第貳項　山臥

修驗行者四種得名の中、第二に山臥に就て釋せんに、上にもいへる如く由來臥伏の兩字は共に之れフスといふ訓に借り依用したるものなりと雖も而かも其間に於て自ら本覺始覺の區別を存しこ

丶に第二の得名として山臥と名くるなり（本覺始覺の區別下に至つて知るべし）。

前には「山」を釋して三身卽一の義とせしも今茲には山を釋して母胎八分の肉團といふ、所以者何となれば、山の形象皿は蓮華八葉に相似するが故に八分肉團心に表顯するなり、所謂其八分の肉團とは吾人が藏する心の臟にして密家にはこれを肝栗駄心といふ、秘藏記鈔に云く

肝栗駄は肉團心なり、これ凡夫の所見にして可破壞の法なり、此處に於て佛心を開く、是れを自性清淨心と名く、

と、卽ち吾人が藏する心の臟は肉に卽して自性清淨の本有八葉蓮華台なり、これ蓋し蓮華の泥中に在つて而かも泥水に染まず穢れざるが如く吾人が藏する八葉肉團心も父母未生以前より本覺無作の法躰として不穢不染不苦不樂無相眞如の本有位に住せるなり、此無相眞如の本有位に住するが故に名けて山臥といふ、深く味ふべき深旨にこそ。

第參項　修驗

第參に修驗の義は本章劈頭に於て一言せる意にて盡す、卽ち本有本覺六大法界の道理を修行して其六大法界本有の性德を實證するを修驗といふ。然るに茲に意得べきの一事は宗といはずして道といふ事これなり、例へば華嚴宗或ひは天台宗、淨土宗等と各々

「宗」の字を附す、然るに修驗に於ては修驗宗といはずして修驗道といふ、其意趣や抑も如何。

蓋し吾人が序説第三に於て驗乘は顯教にも屬せず密教にも屬せず顯密二教を通含すといへるは本據をこゝに置きしなり、所以者何となれば各宗各々所依の經論に本づき一宗一家を建立するに名けて宗と名けしが故に其意味や狹隘なり、然るに驗乘に於ては所依の經論を用ひず法爾無作本覺の躰性を取つて直ちに實修實行を宗趣とするが故に一宗一法に執偏せず顯密禪等何れにも融通するを以て廣寛なり、而して道は能通を義とす、これ宗といはずして道と名けし所以なり、深思以て惑ふ勿れ。

第四項　客僧

四種得名の中最後の客僧に就て一言説明せんに、之亦便宜に從つて實事表相の二に分つべし。

(1)　實事の釋

實事上より客僧の義を釋せば、客とはタビといふ意味を有する字にして諸國を修行し各所を經歷する山伏の輩らを客僧といふなり、或は又之れを客道とも名く、源平盛衰記に維盛入遺熊野詣の段にも「常住の禪より客僧の山伏參り集りて云々」とあるはこれな

(2)　表相上の釋

夫れ吾人の一思一念、一擧一動は皆悉く直ちにこれ法界の活動法界の道場なり、所以者何となれば、一思一念、一擧一動の體性は卽ちこれ地水火風空の五輪と識大との周遍法界體なるが故なり既に一切衆生同一に法界周遍體の作業なれば一として執着すべき物なし、弘法大師嘗つて吽字義に於て述ぶ、因も法界、緣も法界因緣所生の法も法界と、因緣所生の法にして法界なる以上取るもこれ法界、捨つるもこれ法界なり、取捨共にこれ法界なれば其間に於て一物として執着すべきものなし、同時に住所として住所に非ざるはなく居所として居所に非ざるはなし、反對に住所に非ずして住所なり、居所に非ずして居所なり、金剛經に「應無所住而生其心」とあるも全く此意に外ならず、此道理を體得し安住して無着無執なる恰も旅客者の旅宿に於けるが如く、我居住する家にして而かも我居住する家に非ず、隨つて其家に對して無執無着なり今諸法の一物に執着せざる、これを名けて客僧といふなり。

第二章　二種の配屬分別

前章に於て、略ぼ修驗道の名義釋を說き得たりと信ず、此名義を知ると共に茲に更に意得べき二種の配屬分別法あり、これ繁を恐れず本章を設けし所以なり。

第一項　覺道分別

覺道分別なる命題は先德の未だ用ゆるを見ざる所にして或は命

題としては當を得ざるやも知れずと雖も見る人乞ふ余の意を汲んで語に拘泥せざれ。

先づ便宜上圖に吊し而して後説明に入らん。

山伏――始覺、修生
山臥――本覺、本有
修驗――始本雙修
客僧――始本不二

初めに始覺とは本有本覺の理を始めて覺るをいひ、修生とは修して生ずといふ義にして修行に依り自性の心蓮を開覺するをいふ

山伏二字義に

山伏ト者功能如レ前ノ但此ハ乃チ是出胎之後入ニ于茲ノ始覺修驗ノ之峰ニ示ニ彼ノ本覺性得ノ之内證ニ此位ヲ稱ニ始覺ノ山伏ト一矣

と説けるが如く、今行者金胎兩部の峰に春秋順逆入峰し十界の行（十界修行の事後に判然すべし）を修して本覺本有の理を開覺するが故に始覺修生の山伏と名くるなり。

次に本覺とは前章に一言せる如く、元吾人の本體は周遍法界體なるが故に久遠の昔より覺體なり、今始めて覺りたるが故に佛なりといふに非ずして本來の覺體なるが故に本覺といひ或は又これを本有といふなり、山伏二字義に

臥ト者住ニ本有八葉ノ山ニ無相眞如ノ位也是チ名ク本覺ノ山臥ト一

と說けるが如く、本地無作の體性色心に安住するを本有本覺の山臥と名くるなり。

始覺山伏、本覺山臥の意義かくの如くなるを以て二者其優劣を論ずる時は山伏は修行門に於て勝れ、山臥は法體の上に於て優れるものといふべし、所以は卽ち始覺修行し證得する所は本覺の妙理に外ならざればなり。

次に修驗を以て始本雙修といふ所以は修は修行なるを以て始覺とし、驗は驗證なるを以て本覺とするが故に始覺と本覺の雙修といふべきなり、然るに客道は周遍法界の絕對に安住し、所謂始覺本覺共に二ならざるが故に始本不二に配屬するなり。

第二項　三身分別

三身分別とは山伏の相形を以て法身、報身、應身の三身に配當するに名けし命題なり、三十三通記中深秘分第四に於ては「三身山伏の事」として說けるも今は對句上三身分別と名けしなり、これ又便利に隨つて圖示して後說明に入るべし。

優婆塞形——法身
摘髮形——報身
比丘形——應身

初めに優婆塞形とは農工商等在家止住の人にして佛法を信ず、菩薩戒を受けしものをいふ、今此山伏にして在家俗形なるを優婆

塞形といふなり、然り而して法身は周遍法界身にして本有常住の理體なり、遍一切處の身なるが故に十界衆生皆悉く六大法身の體性なり、然れば吾人衆生は生れし當體卽ち有髮の儘本有の自位に安住する法身なり、此故に有髮俗形の山伏を法身形といふなり。

次に摘髮形とは頂髮を一寸八分に摘むをいふなり、其一寸八分に摘む所以は因（金剛界九會）果（胎藏界九尊）不二一體の意義を表するなり、得度の文に云く、

長髮ハ擧動ニ有レ障リ剃髮恐レ毀傷ランコトヲ父母所生ノ身速ニ登ル自性ノ位ニ

肉身ヲ是故ニ可ニ摘ミ切ル一

と。意趣以て知るべきのみ、然り而して其報身に配釋する所以如何となれば、報身とは因位の時三大阿僧祇劫の間難行苦修したる報ひとして得たる佛身にして修因感果の智體なり、今行者亦入峰修行するに摘髮して金胎因果一體の意義を表す、故にこれを報身に配屬するなり。

後に比丘形とは僧形にして剃髮形をいふ、これ或は又聲聞形とも名く、而して應身とは吾人衆生の根氣に應じて現ずる佛にして釋迦如來の如きこれなり、これを聲聞形に配する所以は卽ち聲聞は三乘の中に於て最初の形なるが故に三身中の應身に配するなり而して比丘形を以て聲聞形とするは聲聞の觀法は苦集滅道の四諦にして四諦の中集諦は煩惱の苦因なり、故に煩惱斷除の義を表し

て剃髪の相を現ずるなり。これ聲聞形とする所以なり。

第三章　修驗道の法系

夫れ何れの宗教を問はず其歴史を事實的に研究せんとせば無限の困難と無量の時間とを拂ふに非ざれば到底確實なる史編を期するとを得ず、換言すれば宗教の事實的史的研究は殆ど不可能的難事なり、今修驗道の事實史的研究も亦同ぶく考證確實なる研究を遂げんと欲せば幾多の犧牲と困難とを忍ぶに非れば到底完璧なる歴史を編出し得ざるなり、況んや吾人の如き淺學寡聞の輩の望み得べき處に非ず、然れば今あらゆる點に於て餘裕を有せざる吾人は單古來の師傳に依つて記するに止めおかんのみ、若し夫れ後日機を得て更に研究の歩を進め公表するの運びに至らばこれ啻に吾人一個の幸福のみに非ざるなり、本章更に二項に分つべし。

第一項　峰中法流と惠印法流

修驗道の法流を約分すれば二種なり、峰中法流と惠印法流即ち之れなり、所謂其峰中法流とは曩祖神變大菩薩過去契約の因縁に依り單だ行力を以て衆生を渡せんが爲め役の優婆塞と生れて龍樹大士より親しく入峰修行の軌則を受けし法流これを云ふ、當山、本山、彦山、羽黒の各派を初め比叡山北嶺修驗、日光勝道上人の傳流、筑波の德一上人、婆羅門僧正の傳流等各々小異ありと雖も等しくこれ役君龍樹大士より傳流の峰中法流なり、三十三通記、

修要秘訣集、秘要鈔等之此法流の深旨を傳ふ。然るに茲に更に最勝惠印三摩耶の秘法を傳ふる靈異相承あり、是卽ち聖寶理源大師神變大菩薩の靈氣誘導に因り龍樹大士より直傳せし惠印法流にして又之れを峰受三昧と名く、最勝とは大日の異名、慧とは戒定惠の省字、印とは手相印なり、其峰受三昧と名くる所以は峰中に於て暫時に傳受せるが故なり、靈異相承儀軌、玄深口決等此法流の秘傳を載す。

第二項　法系血脈

本章劈頭に一言せる研究考證の最も難事は此法系血脈にあり、然れども吾人は今これに就て一々詳言する餘裕を持たず、左の法系血脈は大本山醍醐寺所藏の修驗聖教箱中に秘納せるものなり、勿論これに依つて修驗道法系の人々を盡すに非ずと雖も第一項所陳の如く、修驗道に於て峰中、惠印の二法流あるも而かも此二法を兩傳せるは我醍醐當山派なるが故に當山派血脈相承を以て修驗道法系者を盡すとするも强ち無理ならざるべし。

法系血脈

金剛薩埵　龍樹大士　理源大師
觀賢　淳祐　元杲　仁海
成尊　義範　勝覺　定海
元海　實運　勝賢　成賢

憲深定定勝定任
賢助賢俊實濟滿濟
義賢重賀賢深澄惠
源雅義堯深應雅嚴
義演寛濟高賢房演
賢繼實雅元雅信隆
照範果觀高演定
演護眞應宥雄演

以上

第四章　法義の要領

修驗道の法義綱領は修驗秘奥鈔及び修要秘訣集の兩書に依つて略ぼ領得するを得べし、前書は建長六年二月内山旭蓮僧正先師の口説を記し名けて峰中灌頂本軌とせるものこれを更に學匠海浦義觀僧正增訂を施し題して修驗秘奥鈔と名けしものなり、一部書中の内容は峰中修行の諸大事より併せて修驗行者の觀心の要を說く後者は修驗道の肝要なる秘密口決を蒐集せるものにして一書成立の來由を一言すれば、序說第三に於ていへる如く、修驗道切紙は往古に在つては入峰修行々者のみに一通より二通等と順次に實修行者に面授せしものなり、然れども斯くては澆末に至つては旨趣を失はん事を恐れ、河吸房卽傳先達（文龜永正の頃の人か）之れを集め

て五十通として編せしもの之れ本書なり。所謂其五十通とは衣體分十二通、淺略分七通、源秘分七通、極秘分七通（以上を卅三通とす）私用分七通、添書分七通、最極分三通之れを以て五十通とす。今領解し易きに從つて左に細目を擧ぐべし。

衣體分十二通

頭襟　班蓋　鈴繫　結袈裟
法螺　念珠　錫杖　緣笈
肩箱　金剛杖　引數　脚袢

淺略分七通

依經　宗旨　三種卽身　三種問答

修驗用心　邪正分別　世界建立
深秘分七通
山伏二字　臥伏二字　四種名義　三身山伏
寶冠問答　不動十界　法螺兩緒
極秘分七通
十界修行　床　堅　床　精　閼伽水
柱　源　小　木　碑　傳
私要分七通
灌頂敬白　正灌頂　床　定　入峰印證狀
峰中灌頂血脈　小　柴　螺緒印信

添書分七通
行者略縁起　行者尊形　阿字門廻向　靈供作法
五箇問答　入峰修行三祇　山用名類集
最極分三通
修驗道四種阿字　修驗道阿字八箇證義
山伏道付法印證狀

（但し此最極三通は修驗道最極の深秘法事として翰墨に載せざるを習ひとす）

今此等の一々に就て詳說せんか優に一大尨冊をなすべし、然れども今は單だ此等須要なる部分を執意概說するに止めむ。

第壹項　入峰修行の意趣

入峰修行の意趣、換言すれば入峰修行する目的は果して奈邊に存するや、これ修驗道研究者の第一に注目を惹く處なると共に適々一部形式を觀て判斷を下す者は云く、これ修驗道の山嶽崇拜たる所以を證するものなり、と。然れ共吾人を以てこれをみれば此言の未だ盡さざるを斷ず。蓋し山嶽其物を執り直ちに之れを崇拜し或は草木其物を直ちに以て崇拜するならばこれ固より一種の自然崇拜教とし低級なる宗教と做すも敢て不可なしと雖も、修驗道の山嶽及び草木に對する意義並に說明はかくの如く單なるものに於てするに非ず、今姑くかゝる誤解を避くる爲め余をして一言せしめよ。

第壹章第三項に於て吾人は修驗道に所依の經論を用ひざる事を一言せり、而かも其意趣此處に聯結を有するなり。

蓋し入峰して修行する十界一如の行はこれ却て諸經論の所依となるべき處なり、所以者何となれば入峰修行の目的は自身本具の佛知を開見するにあり、而かも佛知を開見すれば地獄餓鬼等の十界は畢竟同一如々にして等しく之れ六大法身なり此道を說き此理を敎ふるは卽ち諸經論なり、此道理を實修實行する之れ卽ち入峰修行なり。然れば知るべし、入峰修行これ單なる山嶽崇拜に非ず草木崇拜に非ざる事を、草木はこれ毘盧舍那如來の直体、大峰はこれ金胎本有の兩部曼荼羅にして十界衆生同居の秘密道場なり。

然り而して其大峰とは熊野、羽黑山等苟くも胎金兩部の曼荼羅を安置する處は皆これ大峰山にして吾人が所持する小山も等しくこれ大峰山なり。

意趣斯くの如くなるを以て修驗道の大峰崇拜を以て山嶽崇拜者若くは自然崇拜に分屬せしむる事當を得ざるべし、更に自下の各項に就て九思研鑽以て妄雲を去れ。

第貳項　十界一如の行

前項に於て吾人は十界一如の行なる語を用ひたり、然らば十界一如の行とは何ぞや、云く十界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人天、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界なり、今修驗行者此十界同居の

秘密道場たる大峰に入り十界の行を一々實修すこれを稱して十界一如の行といふなり、而して其入峰修行に二種あり、順峰、逆峰之れなり。蓋し胎金兩部の曼荼羅道場なるが故に此二種の入峰あり て春秋二期に修行するなり、所謂其順峰とは從因至果の行として迷ひの始めより順次佛果に至る行にして春期入峰を以て之れに配す、且又胎藏曼荼羅の法相は從因至果を表として建立するが故に或は此春期順入峰を胎藏曼荼羅修行に配するなり。逆峰とは從果向因の行として佛界の行より地獄の行に下向して修する行なり、之れを從果向因の法相に建立する金剛界曼荼羅に配して秋期入峰修行とするなり。

十界の行とは業秤、穀斷、水斷、相撲、懺悔、延年、四締、十二因緣、六度、正灌頂之れなり、以下是等十種の行に就て概要を陳ぶべし。

(1) 業秤

業とは罪業なり、秤とはハカリなり、卽ち業の輕重を秤に懸けるをいふ、之れ地獄の行に配するなり。此行に於て昔は十六尺の螺緒を以て新客の山伏を足より首に懸けて縛し合掌せしめ、金剛杖を木の枝に懸けて秤とし、不動石を分銅として計り、若し石より重き者は罪重しとして其所に懺悔せしめしなり。然れ共現今に在ては纔かに形式のみを存し、金剛杖若くは散杖を以て先達山伏

互に所持し以て此業秤の行を表するのみなり。

(2) 穀断

穀断とは普通所謂断食の行にして之れを餓鬼道の行に配し飢渇を表するなり。

(3) 水断

水断とは一切の水を断ち飲用することは勿論鵜飼洗面等をも許さざるなり、これ畜生道の行を表す。

(4) 相撲

相撲とは卽ち角力にして新客の山伏互に相撲を取らしめ以て相互に勝たんと欲して瞋恚鬪諍する形儀を表し、修羅道の鬪諍の相に配するなり。

(5) 懺悔

懺悔とは前非を悔ひ改むる義にして、此慙愧心は唯人間に限りて有する心なり、故に之れを人道に配す。而して茲に至つて初めて水を飲む事を許し以て閼伽の作法を行ぜしむるなり、故に峰中に於ては別に水飲の宿を設くるは之が爲めなり。

(6) 延年

延年とは壽命延年の義にして天上快樂の相を表して娯樂歌舞の行をなすなり、其歌舞の方法は諸山各々不同ありて一様に非ず、卽ち大峰に於ては肘比小打木を打ちて舞ひ、出羽羽黑山に於ては

散杖を以て舞ひ、東大寺に於ては薪の能を以て此行を表すといふ

凡そ此等は皆天上快樂の相を表するなり。

以上は六道の修行にして初入新客の山伏自ら地獄等六道の苦行を實修し、其苦行の相を知ると共に大慈大悲の心を起し以て其等の苦に代り給ふ大菩薩代受苦の御心を生ずるなり。

(7) 四諦

四諦とは苦、集、滅、道の四諦なり。聲聞は鈍根にして淺權の觀法たる四諦の理を聞き初めて涅槃の覺りを證得するなり、故に此四諦の觀法を以て聲聞の行に配するなり。

苦諦——果……現象界の相狀卽苦

四諦

集諦——因……苦の原因

滅諦——果……涅槃界の相狀

道諦——因……涅槃界に到る原因

卽ち苦諦とは現象界の相狀は皆之れ苦なりと觀ずるをいふなり而して其苦の原因は何ぞとならば、煩惱の集りが原因卽ち集諦なりと觀ず、これを集諦と名く。次に滅諦とは煩惱我欲のなき安樂の涅槃境なり、而して之れに達するは聖道を行ずる原因にありと觀ずるを道諦といふ。

此四諦論は佛教發足の原理となるものにして最も重要なる法義なりと雖も今は詳細なる說明に遑あらず知らんとする人乞ふ上圖

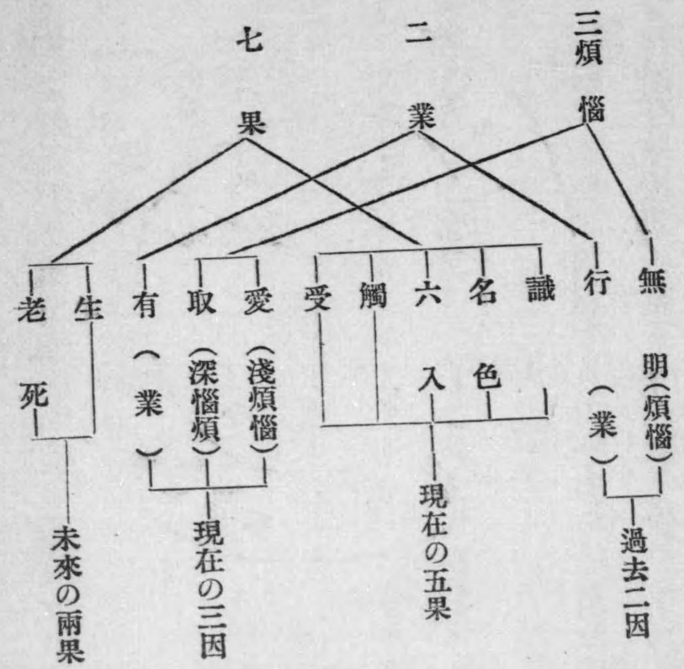
と對照概念領得の上更に他書に依り研鑽あれ。

(8) 十二因緣

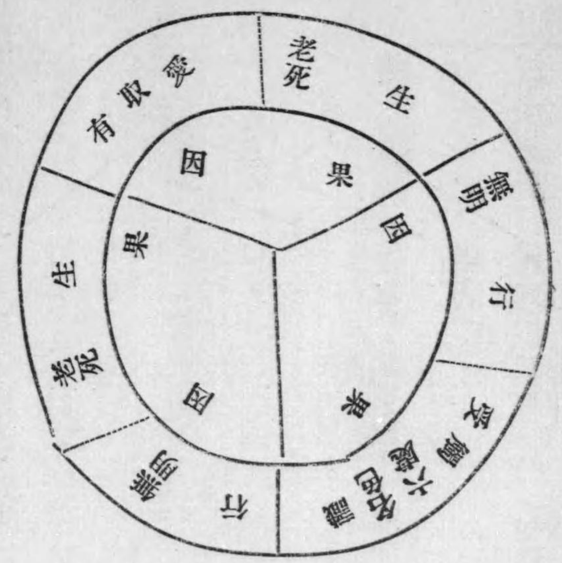
十二因緣の理を觀じて生死の理を覺るを緣覺といふ、故に十二因緣の理を觀ずる行を緣覺に配するなり。緣覺を又は獨覺といふ蓋し前の聲聞は佛菩薩等の敎ゐに依つて開覺するものなりと雖も緣覺は他の敎ゐを俟たず、自ら觀じて開覺するが故に獨覺とも名くるなり。

十二因緣の說明は繁雜なるのみならず其原理に於て四諦と殆ど同一なれば今は說明に換ふるに圖を以てすべし。

第一圖



第二圖



(9) 六度

六度は菩薩の行ずる行なり、菩薩は前の聲聞、緣覺と異なり他を濟度せんが爲めに六度の行を行ず、卽ち前の聲聞、緣覺は自己のみの修得に汲々として他を顧みるに遑あらず、故に世に利己主義者を評して二乘根性といふ、然るに菩薩は自覺、覺他、覺行圓滿として自ら覺り、他を覺らしめ、以て覺行を滿足す、之れ菩薩なり。而して菩薩の行ずる行を六度といふ、六度とは六波羅密（波羅密とは到彼岸の義）にして左の六種なり。

六度
- 檀波羅密—布施—（財施、無畏施、法施）
- 戒波羅密—禮儀作法
- 忍波羅密—忍耐
- 福

進波羅密―精進（勇猛）―
禪波羅密―安心―
惠波羅密―智惠―智

茲に修驗道行者の爲めに附言すべき一事あり、卽ち上來所陳の四諦十二因緣等に於ける苦樂觀念に就き通佛敎的と修驗道とに於て解釋法の相違ある事之れなり。

蓋し修驗道の本旨より論ずれば、八萬四千の煩惱といひ、乃至苦といひ樂といふ、其本源を尋ぬれば等しくこれ吾人一念の心法なり、而かも吾人一念の心法とは六大法界の息風命息なり、換言すれば善惡邪正苦樂共に是れ阿字本不生の一念なり、又六大本有

の体直ちに是れ菩薩無相の六度行なり故に上の觀法行相は共に是れ菩薩代受苦の爲めの觀行なることを忘るべからず、若し妄りに顯網の執に囚はれたる解釋を以て字句に執着したる行をなせば驗道修行の本旨を窺はずして終らんのみ。

(10) 正灌頂

正灌頂とは自受法樂各說三密の修行とて六大法身法味無相の三密、依正一体の修行なり、所謂其無相三密とは、一には身密、卽ち床堅（床堅とは坐禪の義にして六大本具の理を觀ずるをいふ）並に十界本有の印をいふ。二には語密、是れ卽ち口門出入十界本有の明兜をいふ。三には意密是れ卽ち柱源にして命息是れなり（柱源

命息の義は後に至つて知るべし)。而して此無相三密の行たる正灌頂は密宗常途の所謂授明洒水等の有相三密の灌頂と相違あるに注目せざるべからず、即ち密宗常途にいふ三密とは手に印契を結び口に眞言を誦ず意三摩地(三摩地とは等持の義)に住するといふが如きは有相の三密にして今いふ無相三密とは起居言動皆な是れ三密の行なりといふ義なるを以て有相の三密と同せざるなり。

第参項　花供入峰

以上十界一如の行に就て概説し畢りたり、尙此外に入峰修行に於て順逆不二の行ある事を知らざるべからず。

所謂其順逆不二の入峰とは兩部不二の峰にして夏期の入峰を以て之れに配す、或は又之れを非因非果の入峰ともいふ、非因非果とは因果共に之れ六大法界の相なるが故なり、故に此入峰に於ては十界の行なく、四聖修行のみにして床堅、正灌頂、閼伽法(閼伽とは無垢清淨の義にして峰中に於ては新客毎に三荷の閼伽水を汲ましめ三荷の小木を取らしむ、これ閼伽は生本源とて己れの生ずる源を示して修行せしむる義、小木は死所歸とて自身の死する所を修行せしむる義なり、然れば此閼伽法、及び小木は自身生死の二法を修行する義なり)小木(小木とは常の護摩木の事なり)の四個の修行のみなり、然れ共新客ある時は十界修行を行ず、此時は大歳甲乙に順ふとて、甲の年には金剛界、乙の歳には胎藏界の修行を行ずるなり。

現時我三寶院門跡猊下親しく毎歳六月に於て花供入峰せらるゝ

は卽ち是れ順逆不二の入峰に當るなり、花とは蓮華にして供とは自身供養なり。蓋し春は因にして秋は果なり、而して夏は不二に當る事世間の事象に徵して知るべし。而かも蓮華は夏時に於て因(蓮)果(華)同時に開く、之れ不二の入峰に最も相應する所以なり。

因に參考の資に供せん爲め高賢僧正(醍醐寺第八十二世座主三寶院門跡第三十四世にして寳永四年十一月五日遷化せらる、本年二百七年に當るなり)入峰雜集の一節を左に摘出すべし。

一、大峰修行の由來は天智天皇の御宇に役行者始め給ふなり、其後峰中に大蛇出現し山伏入峰斷絶の處三寶院開山聖寶尊師寛平七年入峰せられ彼大蛇退治以來當山本山の山伏入峰し來る。

一三寶院門跡慶長十八年五月廿一日權現樣、同年六月六日台德院樣當山の棟梁たるべき旨仰せ付けられ、是れより本山當山の筋目相分れ、双方入峰して天下の御祈禱仕る外に(省略)此以後名代として毎年先達入峰仕り後權現樣當山方樣迄數ヶ年の間大峰護摩の御札差上げ名代の先達御目見へ仕候且又當門跡三代以前の祖師義演(三寶院三十二世門跡醍醐寺八十世座主にして淮三宮なり、寛永三年閏四月二十一日示寂)入峰の義寛永元年金地院御國師台德院樣御窺の處天下安全の爲入峰有之度尤もの旨(省略)義演遷化入峰不能に相成候又先師覺定(三寶院三十三代、醍醐寺八十一世座主、寛文元年五月十三日遷化)病死入峰の望無之候

以上の文意より推定するに、當山方山伏、本山方山伏の名稱は慶長十八年に至て判然區分せしものなるが如く、又中絶の姿なりし三寶院門跡の入峰再興は後水尾帝寛永年中高賢僧正より始まれるものといふべし。

第四項　成佛論

夫れ成佛は全佛教を通貫する終局の一大目的にして最も重要事項たる事は各宗祖師の一宗一家を建立するに當つて教の優劣淺深を判釋するに專ら成佛の遲速勝劣に論據を措けるより觀るも明かなり。弘法大師は顯密二教の優劣を判下て、三劫成佛と卽身成佛との差にありといへり、卽ち法相三論等の顯教諸宗は三劫成佛なるが故に淺にして密教は卽身成佛を說くが故に其深なりと。蓋し是れ吾人の靈的欲求より見るも必然の斷案といふべきなり。

而して其所謂卽身成佛とは吾人が父母より受けし肉身に卽して成佛するをいふ、眞言宗に於ては此卽身成佛を左の三種に分つ。

三種卽身
- 理具卽身成佛—本有（理具とは吾人が一心に佛德を收むる性德の佛性なり）
- 加持卽身成佛—修生（三密加持に依り佛德を生起す）
- 顯得卽身成佛—修生（我卽大日なりと覺悟し本有の佛德の顯れしをいふ）

今修驗道に於ても等しく三種の卽身成佛を建立するなり、然れども兩者其建立する意義に於て相違あり。

卽身成佛—始覺

三種成佛{即身即佛—本覺
　　即身即身—始本不二

初めの即身成佛とは吾人の肉身即ち是れ大日如來なりと開見するをいふ、故に即身に佛なりと始めて悟りし位なるを以てこれを始覺に配するなり。

次に即身即佛とは吾人の本性は即ち是れ六大法身佛にして今始めて覺りたるが故に佛躰なりといふには非ず、本より以來即ち是れ大日覺王如來なり、故に前の即身成佛は顯得成佛に相當し、此即身即佛は本有理具成佛に相當するなり。

後に即身即身とは修驗道不共の立義にして、由來衆生といひ佛

といひ、乃至始覺といひ本覺といふ、之れ畢意假名字の上の對辨にして佛といへばとて吾人の認識界を超越して存在するものに非ず、又衆生といへばとて佛を離れて存在するに非ず、生佛共に此身此儘なりといふ意を即身といふなり。

蓋し前の即身即佛は本体的に衆生を觀察せるものにして今此即身即身は即事而眞の本義に立ちて說示せらるゝものといふべきなり。

第五項　色心論と生死觀

色心論と生死問題共に之れ古今の大問題にして一朝一夕にして能く解き得べき問題に非ず、然れ共今は單だ修驗道の此問題に對

する態度を概説するのみ。

而して所謂其色とは物質にして心とは精神なり、凡そ宇宙の萬象は廣汎にして數量を絶すと雖も要するに物質と精神の二種に該攝し得なり、眞言宗に於ては地・水・火・風・空（以上を五大色法とす）識（第六大心法）の六大を建立して此廣汎なる森羅萬象を該攝し成立の原由を説明す。今修驗道に於ても六大を立つる事言家と相同じ、然れども茲に其説明の意趣に於て兩者間相違あるに着眼せざるべからず、即ち眞言宗に於ては説明の最後に至ては色心不二を説き法爾六大を説くと雖も第六識大に於ては單た識大として特殊の意義を以て説明せず、然るに修驗道にては色心の二者共に阿字に攝取せ

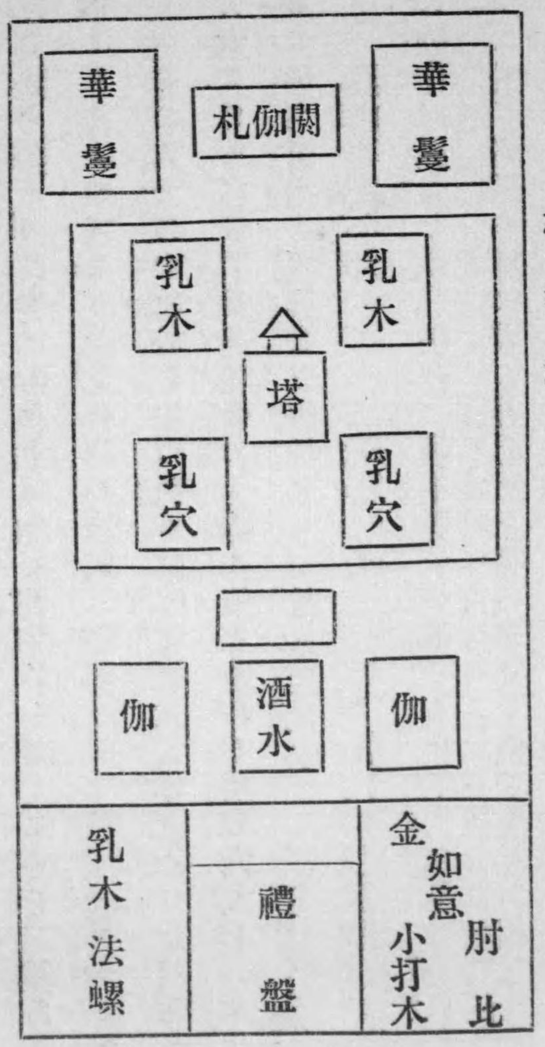
しめ、而かも其阿字は第一命息心法なりと説くが故に六大を建立するも其終局の到達點は吾人の息風に皈するなり。

然り而して色心の二者を阿字に攝皈せしむるといふ所以は蓋し阿字息風を根柢とし六大各々を説明し盡すが故なり、即ち阿字八箇證義中第六法爾六大の説明に依れば阿字命息の上に六大各々の本性を建立し以て本具の六大と説くより見るも明かなり。

抑も吾人が識慮分別心を生ずるは何故ぞ、修驗道の法義に從へば、此本具の命息が縮まる時に於て初めて慮知分別を生ずるなり又吾人の生ずる最初も此息風より起り、此身滅する時亦此息風より退去す、故に生をイキル（息入）といひ、死をマカル（退る）といふ、

換言すれば、吾人の生死は共に是れ息風の支配する處なり、即ち法界より吾人の身中へ命息を入るこれ生にして、其命息の法界へ皈入するこれ死なり、是れを事實的に顯示せるを彼の正灌頂の時用ゆる柱源とす、即ち柱とは乳木にして乳木二本を飯の上に立て父母の二氣、吾人出入の命息を表するなり源とは陰陽和合二水の義なり。此等の深旨更に問へ

柱源壇の圖



三有とは卽ち生有、中有、死有是れにして、六大とは地、水、火、風、空、識これなり、此六大を說明する形式に於て三種ありこれを名けて三有の六大と云ふなり。

三有の六大の中に於て先づ初めに生有の六大とはこれを又修生の六大とも名け、父母和合の因緣に依り造れる所の六大をいふなり、卽ち吾人の皮肉骨は堅性なるが故に地大なり（地大は堅固を性とす）、濃血等は水大にして、煙氣は火大なり、擧手動足閉眼開口等の動作は風大なり、鼻孔、腹中等の空洞なるは空大なり、命息の上に於て諸種の緣に觸れ善惡邪正等の分別を做す念々の相は卽ち識大なり。

次に中有の六大に就て說明せんに、中有とは智度論には中陰といひ、陰は蘊とも譯す、蘊とは聚衆の義にして諸法の假和合を表するなり、卽ち吾人の体は色心の假和合なり、此假和合の身心は一期の業力盡くると共に滅亡し同時に今世に作りたる業に依り未來の果報を受く、其前相として微細なる五蘊を受くるなり、これを中有といふ。而して今此處に中有の六大といふは、吾人は法界中有の身心なるが故なり、又是れを自性本具の六大ともいふ、所以は卽ち今此中有六大は法界の一氣を受得したる處の吾人の命息にして此命息は法界中に遍滿せる一氣なり、故にこれを自性本具の六大とも名くるなり。而して此法界遍滿の一氣、其動く時を風

大といひ、靜なる時を空大といふ、又此一氣、命息堅固にして壞るゝ事なきを地大といひ、此命息の一氣自ら濕潤の性を具するは水大にして煙氣を具する所これ火大、又命息の上に念々種々の思慮を生ずるはこれ識大なり。

後に死有の六大とは又これを本有の六大とも名く、卽ち死有とは生有の色心の滅する時をいふ、而かも其滅する時も死滅するに非ずして法界に皈入するなり、故に「死するも存す」といふ意義を以て死有の六大といふ、之れ修生に對しては本有といふべきなり。

斯くの如く三有の六大ありと雖も生有、中有の六大も畢竟本有の六大に依つて建立し得るなり、何となれば今生有、中有の六大を以て波とし、本有の六大を以て水として譬へんか、波は水に因つて生起す、水なければ波立たず、水の外に波なるもの別存するに非ず、三有の關係此例を以て知るべきのみ。

以上六項に互る説明に於て略ぼ修驗道法義の如何なる形式を以て成立し居るやを説き得たりと信ず、尙此外に於て作法に關する諸種の樣式、例せば峰中床堅等ありと雖も此等の作法は紙筆を以て説明するも了解困難なるのみならず今一々細説するの餘裕を持たず、志す人乞ふ更に道に入つて尋ねよ。

問、頭襟、結袈裟等を用ゆるは何等の意義を表するや。答、凡そ修驗道に於て用ふる總ての器類法具は法身毘盧舍那の三摩耶形にして凡卽是佛の秘密器なり。問、其等の意義何に依つて知り得るや。答、三十三通記の中の衣躰分に依つてなり、近くは海浦義觀僧正著修驗道法具要解を見て知るべし、今此等一々の説明に遑なし。

問、天台宗に於ては一心三觀といひ、修驗道に於ては一身三觀といふ、其相違如何。答、天台宗の一心三觀とは心法を的指して空假中の三諦圓融する理を觀ずる觀法なり、修驗の一身三觀とは一身の上の三觀なり、所謂其一身とは修生の六大依身なり、三觀とは佛体、衣服、飲食の三なり、佛体とは床堅(座禪の義)にして衣服は頭襟、鈴繫等なり、飲食とは柱源(命息の義)なり、口説に云く

衣具は色法を資く、柱源は心法を資く、所謂袴と脚半とは地大を資く、袍衣は水大を資け、袈裟は火大を資く、頭襟は空大を資く、柱源は風大を資く、風大は卽ち心法なり、衣食は身佛を資く。

と、之れを以て知るべし。

問、修驗道に於ても他宗他家と同ぶく何故に戒律を以て肉食妻帶を嚴禁せざるや。答、他宗他家に於ては肉食妻帶を以て不淨とし、之れを行ずるは濫行とすと雖も今修驗道に於ては然らず、修

驗道の意は、濫行は愚痴にして、愚痴は不淨の根源なり、故に愚痴無明を以て不淨とすれ共婬欲酒肉を以ては不淨とせざるなり、蓋し一切諸法は自性清清にして垢もなく穢もなし、邪正一如なり此自性清淨の理を獲得する之れを戒行といふなり。問、修驗行者閉眼の後導師を雇ふべきや。答、修驗行者入峰灌頂の日己でに一印大日の覺王位に登る、己体卽ち淨土にして別に所詣の土なく能引の師なし、何ぞ導師を要せんや。

問、峰中灌頂と惠印灌頂と同異如何。答、峰中灌頂は（第參章第壹項參照）曩祖神變大菩薩箕面瀧穴に於て龍樹菩薩より感見相承せし灌頂にして或は之れを柱源灌頂とも名く、此灌頂に於ては闕伽札碑傳を以て血胍とす（秘口に云く、闕伽札とは床堅の血胍なり ぁ字卽ち五大、五智の本源なるが故なり、ぁ字又床堅なり、二本の乳木は柱源の血胍なり、故に新客等此二種共に一生の際之れを隨身す云云。秘記に云く、闕伽札とは寶篋印塔なり、寶とは意識なり、篋とは五大なり、印とは凡聖不改の義なり、衆生の六大を指して寶篋印塔といふ、塔とは無所不至の印なり云云）然るに惠印灌頂は開山理源大師毒蛇降伏大峰再興の時神變大士出現して此密法を傳へ、更に大師を誘導して龍樹大士に謁せしめ惠印三昧耶法を相承せり、覺悟灌頂、滅罪灌頂、傳法灌頂の三種は此法流にあり、（此灌頂は開山大師始めて大和鳥栖村鳳閣寺に於て大祇師は大師、中祇師は觀賢

小祇師は貞崇として修行せられたり、）此惠印灌頂に於ては傳法血脈あるなり（第參章第二項參照）兩者の相違知るべきなり、尙知悉せんとする者は峰中灌頂本軌に依つて峰中灌頂の作法及性質を、靈異相承儀軌に依つて惠印灌頂の作法及性質を良師に就て窺知すべし。

修驗摘要記　終

大正五年四月二十八日印刷
大正五年五月五日發行

【定價貳拾錢】

修驗摘要記

著述兼發行人　京都府宇治郡醍醐村東小路二十二番地　細川孝源

印刷者　京都市下京區木津屋橋堀川東入　井出時秀

印刷所　京都市下京區木津屋橋堀川東入　六條活版製造所

發行所　京都府宇治郡醍醐小字上端山町四十一番地　聖役協會

□不許複製□

佛教和讃五百題

菊判半截形 千三百餘頁　代價未定　大正五年五月發行

本書の内容は釋迦、藥師、觀音、地藏、聖天、十三佛、聖德太子、行基、役行者、傳敎、弘法、智證、興敎、永平圓光、空也、日蓮、蓮如、菊萱道心、中將姬、松虫鈴虫、梅若丸、お七、因果、孝行、四の河原、血池地獄、女人往生、光明眞言、安心、阿波鳴門、施餓鬼、いろは、無常、涅槃、極樂、四國順拜、冤王、十善、ほこりたゝき、其の他從來の和讃書物になき秘藏の異本、其他珍しき和讃等三百何十題即ち和讃三百題（約百五六十題）和讃集（約五十題）より二倍又は六倍强を集めたるものなり。

御購求の御方ははがきにて御申込み下されば製本出來次第御送り致し代金は集金郵便にて後より請求申し上げます

京都市寺町通五條上ル　藤井佐兵衛

眞言宗御用書林　振替口座大阪三一五一番

大字新版　元三御闍本　正價五拾錢　送料六錢

元三大師の百番の御闍にして種々の吉凶を判斷し得らるゝものにして、今般大字に新刻したる故、印刷極鮮明なり。

諸雜誌論說　密敎研究資料　索引　正價拾五錢　郵稅貳錢

諸雜誌に現はれたる諸家の密敎研究に關する論文の目錄なり。

眞言　哲學　正價九拾錢　送料拾貳錢

眞言密敎の深大幽玄なる敎理を闡明せんが爲めに筆を傳通略史に初め制敎論兩部神道に攷めたれば一讀すべき書なり。

理源大師實傳記　正價拾八錢　送料四錢

理源大師の御傳記は甚だ世に少なき有樣なり。

役行者御傳記　正價貳拾錢　送料四錢

本書は役行者幼少の頃より御一代の事蹟を悉く記したるものなり。

326
409

終